少年少女世界のノンフィクション

Transportation and Industry. Prio
the city had one of the largest railroad sta
with service to all the leading German
road and rail facilities permitted the exter
of the large deposits of lignite in Saxony.

by the French themselves. Meanw
their attack. The French, having n
either swam across the river or a
French losses were very heavy, incl
prisoner.

metal wares, m
toys, combed wo
the chief ones b
principal items
cloth, and glass.

was established in 1409 by 46 professors and 369 stuc
who had withdrawn from the University of Prague du
the Hussite conflict in that city. Following
tion of Prague, under Bohemian influence and at the
pense of the Germans, Frederick I of Meissen

and his brother Wilhelm invited the disser
at Leipzig and to establish there a university
that in Prague. The rulers provided for tw
houses, the *collegium major* and the
student body was organized into four nations:

LEIRIA [leiri′ə], an e
Estremadura, west central
The City. The city of
Lis River some 15 mi. inlar
halfway between Lisbon ar

ony, Bavaria, and Poland, according
tern of student organization in other
Lectures were given at
of the faculty, a practice which had
such other European universities as the

Leiria is primarily an administrative
place for the agricultural produce
cereals, fruits, vegetables, wine, and
local industrial products
atives, glass, fertilizers, and ironwork.

LEIPZIG, BATTLE OF (Oct. 16 to Oct. 19, 1813), also called the Battle of the Nations, an engagement in which Napoleon was defeated by the allied armies of Austria, Russia, Prussia, and Sweden. The French ruler's willingness to fight was due mainly to his fear of being cut off

The city was
tak-1. by the V
again in 850.
its loss, in 1140
castle there on

The faculties at the university
medicine, veterinary medicine, ph
social science, and pedagogy.
are a number of institutes:
physico-mineralogical, pathological

and the University of Paris. In the
versity, humanism was espoused, and
Reformation influenced
tution. The high standards attained by
lowered by the statutes of 1559, which s

LEND-LEA
under which t
War II. In its
the
every Allied po

LE NAIN, THE BROTHERS [lə nãē′], Antoine (c. 1588-1648), Louis (c. 1593-1648), and Mathieu (1607-1677), a family of French painters born in Laon, who worked in Paris on genre scenes of peasant and petty-bourgeois life. Neglected by official taste after their death, and quite for-

It is now possible to distinguish the works of
Antoine, who painted small, somewhat
as the *Atelier* (Bute, London) and the *Family*
(Louvre) from those of the youngest, Mathieu, w
larger, more courtly canvases such as

Ram. Much better than eithe
His works, related
general, retain a peculiarly
Hay Wagon (Louvre) has
tality that lifts it from the

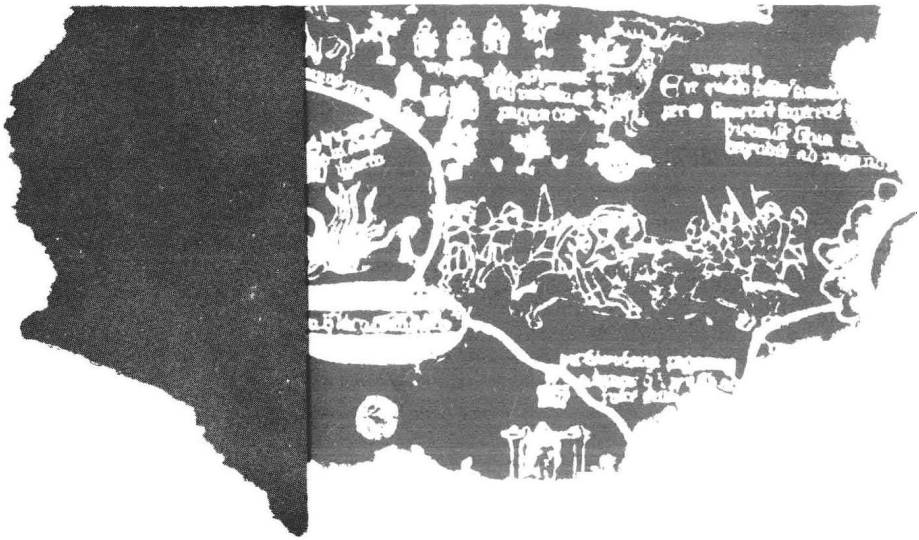
Despite the unacademic character
brothers Le Nain were among
Academy. Shortly afterwards, Louis
a few days of each other, the former
the latter on May 25. Mathieu lived

LONG BRANCH, a suburb c
tario. Canada, lying along the sho
west of the city. Truck bodies, pa
aluminum, and magnesium castin
ing World War II a huge plant r

年少女世界のノンフィクション〈32〉

七歳の捕虜

―中国少年と日本軍・戦火を越えた愛



光　俊明 著

偕成社

少年少女世界のノンフィクション〈32〉七歳の捕虜

一九七三年一月　第一刷
一九七五年七月　第二刷
著　者　光　俊明
発行者　今村　広
印刷者　中村　榊
印刷所　新興印刷製本株式会社
発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ガ谷砂土原町三ノ五　振替東京一三五二番

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©光　俊明　1973

N・D・C 916　偕成社　1975年　224p.　22cm

著者の了解により検印を廃止する

8323—711320—0904
Printed in Japan

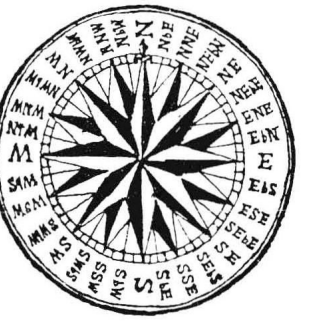
＊読者のみなさんへ

私の名は、光俊明。この名に、私の秘密がかくされています。

生みの親がつけてくれた名ではありません。

話は、六歳のころから始まります。ふつうの人なら、こんな小さいときの記憶は、あまりはっきりしていないことでしょう。私だって、母から弁当を作ってもらい、毎日学校へ通うような平凡な少年時代を送っていたら、こんなおさないころのことは、はっきりと思いだすことはできなかったと思います。

しかし、六歳のころから、わすれようとしてもわすれることのできないできごとが、私の身の上に、つぎつぎにおこりました。十一歳になるまでの私のおさない人生は、弾丸の雨をくぐり、アジア大陸の道なき道



を歩きつづける毎日でした。

これから述べる私の話は、その思い出をありのままにつづったものです。けれどもなにぶん小さいときのことなので、断片的な記憶をつなぎあわせたものとなりました。わすれかけている部分は聞ける範囲の人たちから話を聞き、不足をおぎなっています。

日中戦争のさなかに中国大陸の北の奥地で生まれた私が、ほんとうの名も知らず、親の顔さえわすれたまま、ぶじに育ち、今こうして日本にいるふしぎを思うとき、人間の運命をくるわせてしまう戦争のおそろしさとともに、戦火の中でもけっして失われることのなかった、多くの人々の国境を越えた愛情のことを考えずにはいられません。

ともあれ、私の話は、ぼんやり霧のなかで物を見ているように遠い、昭和十六年の終わりごろから始まります。

著者　光　俊明

著者の略歴　一九三五年ごろ中国の山西省で生まれる。日中戦争の戦火に追われて各地を転々とし一九四三年六月日本軍の捕虜となる。日本軍と共に中国大陸を南下、サイゴンで敗戦を迎えたのち日本に渡り、熊本県で少年時代を送って熊本商科大学を卒業。現在は神戸市の貿易会社に勤務。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

■もくじ

七歳の捕虜

——中国少年と日本軍・戦火を越えた愛

クルミの木の思い出

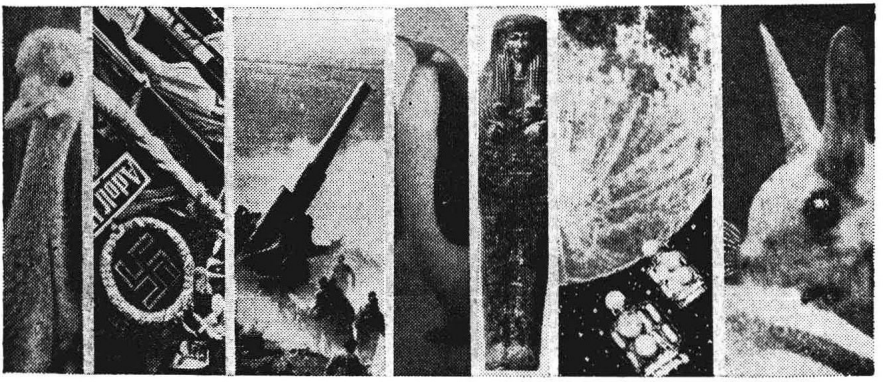
父の召集……11

夜逃げ……14

放浪の旅……19

恐ろしい日本軍……25

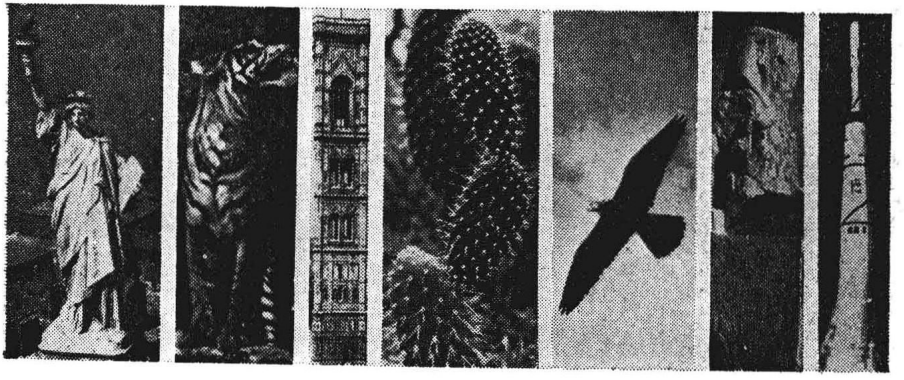
出発の朝……30



ついに学校へ……34
はじめての行軍……39
洛陽へ、洛陽へ……47
雨の朝の降伏……54

日本軍とともに

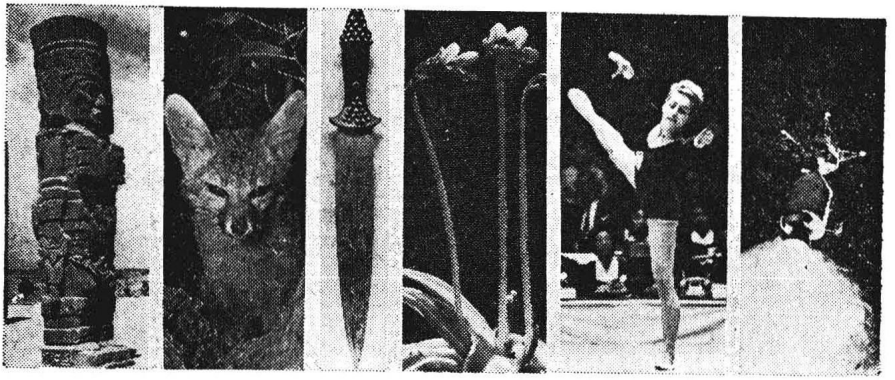
小さい捕虜……59
俊明から俊明に……63
第七中隊のマスコット……68
あれが黄河だ！……71
田之上軍曹の手紙……78
母のおもかげ……83



運城から南京へ……89
『夕焼け小焼け』の歌……92
外出の日に……97
あずかった手紙……100

ひろがる戦火

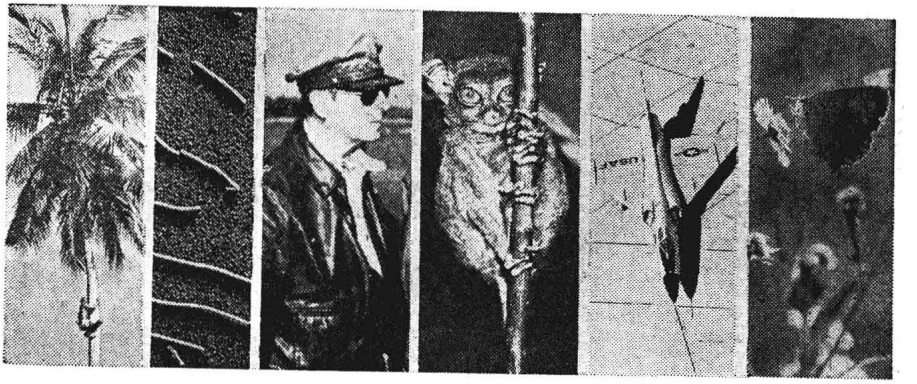
三郎くんとの友情……107
激しい爆撃……110
八路軍……115
中国兵の死体……120
国境をこえて……125
仏印の旅……129



トラの出る山……132
自転車でのけが……138
敗戦の日……143
ふたたび捕虜に……146
夕映えの中で……150

第四の父

「お父さん！」……154
赤ベコの大尉……160
きもだめし……166
むかえにきた中国兵……171
日本へ行きたい……174



帰国命令……178
これが日本だ……185
大尉の結婚……191
日本の学校で……194
倉内曹長の死……198
はるかなる母へ……204

◉解説

1 俊明と私……加地正隆……210
元毎日新聞北京支局長
2 日中戦争と『七歳の捕虜』……高田富佐雄……214

◉年表……220

●装幀――AD沢田重隆・D坂野豊　さし絵――鈴木登良次　図表――進英社

●カバー絵説明

陸軍第三七師団二二七部隊第七中隊の捕虜となった著者（七歳）と、第七中隊の兵隊さんたち。前列右より、生田軍曹、著者、倉内曹長、後列右より、森軍曹、石川上等兵、中曽根軍曹、松尾上等兵。（一九四四年三月、中国・運城にて）

●写真提供――桐生曹一・加地正隆・光俊明・潮書房・中華民報

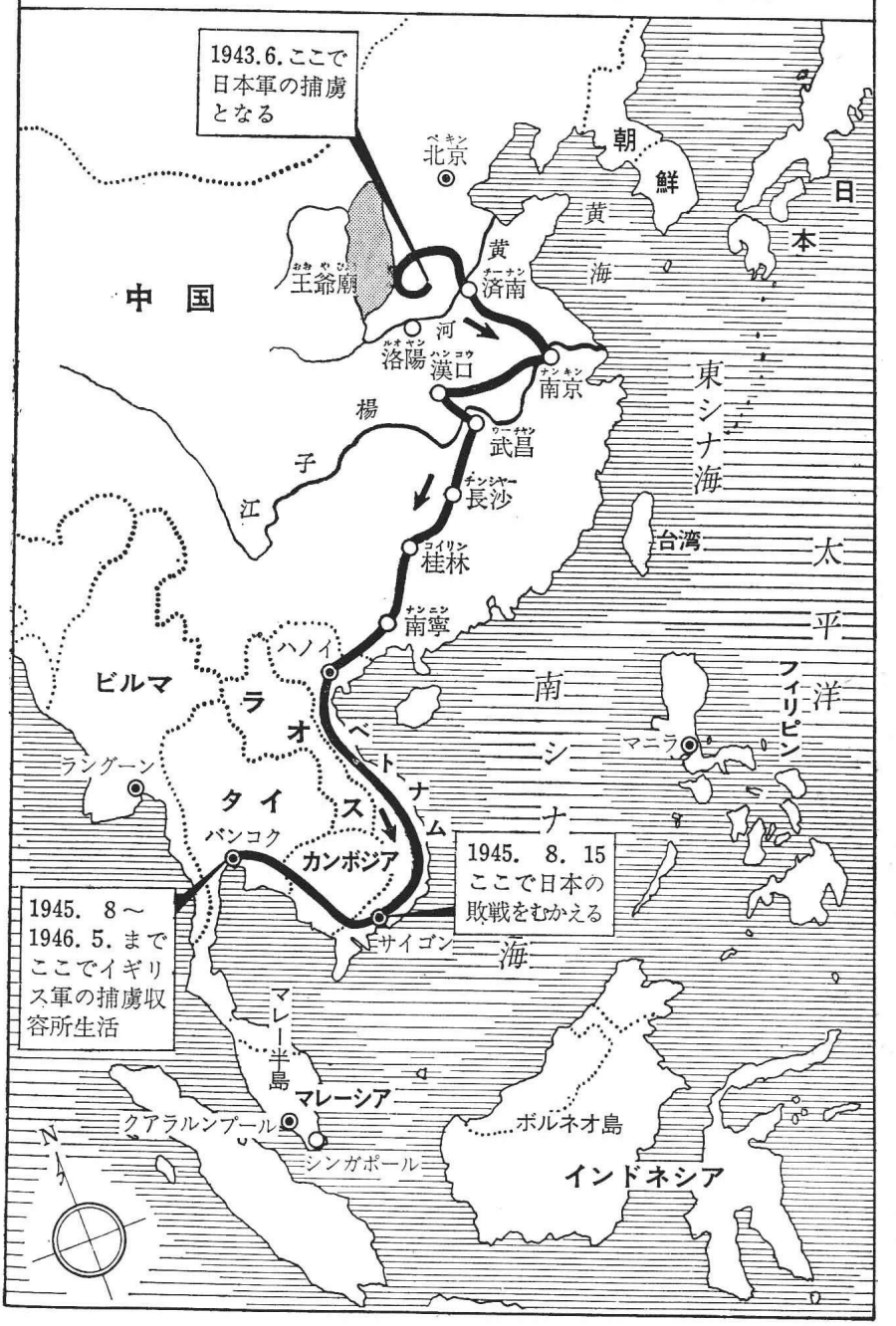
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七歳の捕虜

＝中国少年と日本軍 戦火を越えた愛

光 俊明 著

著者が日本軍とともに歩(ある)いた7000キロの道



クルミの木の思い出

父の召集

たしかではありませんが、私は昭和十年十月、中華民国山西省の南部で生まれました。両親はともに中国人ですが、名前すらおぼえていません。

私の生まれたところは、市場を行きかうたくさんの人々がいた記憶から想像すると、かなり大きな町ではなかったかと思います。家は市場から五百メートルぐらいはなれた静かな所にありました。そのなめ向かいに町いちばんの金持ちといわれていた伯父の大きな家がありました。伯父の家の前をちょろちょろと流れていた小さな川。そして大きな門の両側に植えてあった二本のクルミの木。その実を石で落としては食べたことを、なつかしく思いだします。

家の前の静かな通りには、吹くとプクプクときれいな音の出るガラスのおもちゃを売って歩く人、米の粉でまるめたまっ白なあまいだんごを作る人などの姿があり、母にこづかいをせがんではよく買いにいったものでした。

ある朝のことでした。父がパンを一こ買ってきて、母にだかれて寝ている私を起こし、父も母もひと口も食べようともせず、私に食べさせました。日中戦争（一九三七年七月七日の盧溝橋事件をきっかけとしておこった日本と中国の戦争。日本は中国全土に進軍し、一九四一年十二月八日、太平洋戦争に発展して、一九四五年八月十五日、日本の敗戦で終わった。日華事変。）がはじまり、食料難の時代だったので、パン一こでも手に入れにくかったのです。それをよく知っている私は、ひとりで食べるのは気がとがめました。

いっしょに寝ていた母に、

「媽媽（お母さん）、半分あげよう。」

と、わけてやろうとしましたが、

「せっかく爸爸(お父さん)がおまえにって買ってくれたのだから、ひとりで食べなさい。」

といって食べてくれません。母は私の気持ちをくんで、いかにもかわいくてかわいくてたまらないというように、強く私をだきしめ、ほおずりをしてくれました。父は、私がむじゃきに食べているのを、枕もとにすわってじっと見ていました。思えば、これが父から受けた最後の愛でありました。

私には妹がひとりいました。よく妹の手を引いて遊びに出ましたが、妹は私といっしょに歩くのがせいいっぱいでしたから、たぶんそのころ三歳か四歳ぐらいだったのだろうと思います。

私の家は余裕のある生活ではありませんでしたが、親子四人の暮らしが不自由というほどでもなかったのです。それが戦争によって一変してしまいました。

日中戦争がいよいよ激しくなり、隣の町にも日本軍が進駐してきました。あるとき、中国の兵隊さんが、私の町に兵隊を募集しにやってきました。ひとつの町内からひとり兵隊をだすことになり、私の町内からは父がえらばれたのです。これが不幸の始まりでした。父がえらばれた理由は、

「体格がいいから……」

ということでしたが、それは表向きのことです。父は単純素朴な人間で、おまけにたいへんな短気者。人と意見があわなければすぐけんかするので、みんなから敬遠されていました。町内の人たちは、自分たちが責任をのがれるために、父ひとりに犠牲をはらわせたのです。

私たち家族にとって、父の存在がどんなにたいせつか、よくわかっているのに……。

父が兵隊に行くとき、どんなかっこうで、どんなことばを残していったのか記憶にありません。ただ母と私、それに何も知らない妹が涙で父を送りまし

た。父が行ってしまうと、私の家から笑い声が自然に消えてゆきました。母は金持ちの伯父から援助を受けようとせず、ふたりの子どもを育てるために、悪戦苦闘しました。

そうした母の姿を見るにつけても、父との楽しい記憶の数々が思いだされてしかたがありませんでした。

父はよく芝居につれていってくれました。さむらいのような人が、背中にたくさん三角形の旗をさし、底の厚いくつをはき、音楽にあわせて、手にはおの、腰には大小さまざまな刀をさして舞台にあらわれると、

「あの人の顔がこわいよ！」

と、しっかり父にしがみついてはなれなかったこと。何百段という高い石段の上に築かれたお寺にお参りに行っての帰り、下を見ると目がまわりそうだったので、

「目がまわるよ。目がまわるよ。……」

と目をつぶり、父の背中に吸いつくようにおぶってもらったことなど……。

一家そろってすごすしあわせは、二度とわが家をおとずれませんでした。

父が行ってしまうと、母がいくらがんばっても、女の手ではふたりの子どもを養っていく力はなかっ

たのです。生活が目に見えて困窮していき、とうとう妹を養女にやらなければならないはめになってしまいました。

どんなに生活に困っても、ただひとりの妹を、人にやるなんてどうしてもいやでした。私は母に最後まで反対しつづけたのですが、それはむだな抵抗でした。

ある日、妹は見知らぬ人につれていかれてしまいました。そのときの火のついたような泣き声……、いまでも私は、この声が耳についてならないのです。

「妹妹（妹）をやってはいけない！」

泣いている妹をとり返そうとして、何度も何度も見知らぬ人にとびついていきましたが、子どもの力ではどうすることもできませんでした。でもあきらめきれず、私は大声で泣きわめき、おさえられながら精いっぱい抵抗をつづけましたが、妹はつれていかれてしまいました。

母はその間、ただ悲壮な顔で悲しみをこらえていました。

夜逃げ

妹を養女にやったからといって、生活はいっこうに楽になりませんでした。こんなとき伯父が私をもらいにきました。伯父は豪華なやしきをかまえ、町いちばんの金持ちといわれていましたが、私の家とはうまくいっていませんでした。古風な伯父は、この時代にしては近代的で、そうとうはでなところもある私の母が気に入らなかったのでしょうが、父はその反対をおしきって母と結婚したのです。伯父は、「もうあの親不孝なやつ（父のこと）は戦死したかもしれない。いつまで待っても帰ってこないよ。おまえたちの結婚にあくまで反対してきたおれには、生活の保障をしてやる気持ちはないが、この子をおれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com